

プロジェクト名：児童の成長と描画発達との相関についての研究

ーさいたま市立大久保小学校での20年に及ぶクロッキー実践の検証ー

代表者：小澤基弘(教育学部・教授)

1 研究の概要

さいたま市立大久保小学校では、今日に至るまで20数年来、毎週火曜日朝時間に朝活動として描画活動（クロッキータイムと称している）を続けている。このように長きにわたってクロッキー（即興的素描で「ドローイング」とも呼ぶ）を朝活動として実践している例は全国でも稀有である。1年から6年に至るまで、一人の児童が年間50枚にも及ぶクロッキーをコンスタントに描き、その結果6年間分約300枚（/人）に近い集積として残される。その集積から描画表現の変遷が俯瞰できる。その変化は子どもの成長と連動したものであり、そこに明確に成長と描画表現との相関を読み取ることができる。しかし、残念なことに、こうした表現記録の分析と省察は当該小学校ではこれまで全く行われてこなかった。本研究では、これまでの当該小学校に残されている児童のクロッキー、現在在籍している児童（1年から6年までの）の今年度中の本活動によって描かれた全クロッキーを画像として網羅的に採取するとともに、考察に値する作例を描いている児童から主観的な感想（クロッキー活動が与えた影響や発見等）をアンケートや直接の聞き取りにより、表現と聞き取り内容（主観的感想）との相関を把握する。それらを通して、描画発達（変化）と子どもの成長との相関を明らかにすることを目的としている。尚、本研究は今年度を初年度として、今年度1年生に入学した児童が6年間を経て卒業するまで継続的に進められることになる。それによって初めて6年間を通した児童の心の発達と描画との相関の全体像を俯瞰することができるからである。

2 研究の成果

本研究を始めるに当たり、これまで20年来見直されることがなかった大久保小学校のクロッキータイム年間計画を、大久保小学校図工主任の教諭（馬場朋子教諭）、小澤研究室の院生・学部生と共に精査し、学齢に応じた無理のない描画主題を設定し、それらを新たな年間計画として系統的に配置し、それに基づいて一年間の活動を展開するようにした。また、これまで20年間の大久保小学校でのクロッキータイム活動の実態を把握すると同時に（ほとんどの描画作例は散逸しており収集は極めて困難であった）、平成24年度1年次に入学した児童から6年生まで、一斉に新たな年間計画に従って行われたこの朝活動の成果である画像記録をとり、また各学年における活動実態のビデオ記録、毎学期の鑑賞タイムでの児童の振り返り（言語活動）の様子、この活動についての随時の児童へのアンケート調査（言語活動）を実施した。新たな年間計画やこの活動の様子、アンケートの内容とその結果等々については、「小学校の朝活動における描画（スケッチ）が創造性育成に及ぼす効果についての研究Ⅰ」（『大学美術教育学会誌』第45号：八桁健・小澤基弘共著）と題して発表した。

また、大久保小学校の他に川口市立在家小学校でも今年度から同一内容のクロッキータイム（在家小ではスケッチタイムと称している）を新たに開始した。在家小学校での活動についても、大久保小学校同様に画像記録やアンケート調査等を実施した。20年来朝活動として描画活動を継続してきた小学校の実態と、今年度から初めてこの活動を始める小学校の二校の実態を把握することによって、この活動の継続的な意味と児童の成長に与える効果について、相対的に比較検証が可能となるとの判断の下、当初の研究計画には位置づけていなかった在家小での活動も、本研究に加えることとなった。大久保小同様に、在家小についても、今後6年間継続的にこの活動を検証していく予定である。



「肩を組む友達」をテーマにスケッチしている様子



学期末の鑑賞タイム（自分の作品・友達の子の感想を言い合う）



自分の作品を廊下のクリアホルダーに掲示している様子



校内の廊下に掲示されたクロッキータイム作品の様子



記録されるために整理された作品群



高速スキャナーで画像記録している様子

3. 今後の展望

平成 24 年度における本研究は、研究の初年に当たる。つまり、新たに精査して作成した年間計画に従って、今後 6 年間、つまり新 1 年生が 6 年を経て卒業するまでの間、朝活動の描画を記録し（一年間に 50 枚程度、6 年間を通せば約 300 枚/人となる）、また随時この活動に対する児童の感想等をアンケート調査し、また自己作品の省察（学期末毎の鑑賞タイムにおける）を記録することにより、一人一人の児童が 6 年間でどのように成長したかを、「描画」という共通した切り口から検証することが可能なのである。また児童の他の学力と描画内容との相関的検証も可能となる。また本研究は、いわゆる教科としての図画工作科における活動としてではなく、あくまで教科外の朝活動として描画を扱う点に意味がある。つまり、教師も児童も評価を気にすることなく描画に取り組むことが出来る故に、児童のもつ本来性がそこには留められ得ると考えられるからである。また描画活動が他の教科に与える影響もそこから量ることができるだろう。以上も含め諸々の観点から、この活動の継続的検証は小学生の心の発達の在り様を把握する上で、非常に貴重な手がかりを与えてくれるものと考えられる。また、研究成果でも述べたように、当初の予定を越えて、川口市立在家小学校でも初めてこの活動を朝活動の中に加えて今年度から展開している。大久保小・在家小二校の活動の比較検証も可能となる。20 年来この活動を展開している学校との比較、また地域性と児童の成長との相関の比較検証等も可能となる。今後本研究は、この二校での活動を軸にして進めて行くこととなる。